

「日本の自殺」

JJ1SXA/池

われわれの知っている最古の文明の出現は、現代から六千年以上さかのぼることはできない。しかし、この六千年の歳月の中に、ミノス、シュメル、マヤ、インド、シナ、シリア、ヒッタイト、バビロニア、アンデス、メキシコ、ユカタン、エジプト、ヒンズー、イラン、アラビア、ヘレニック、西欧、正教キリスト教、正教キリスト教極東など、二十一の文明の「種」が発生し、成長し、そしてあるものはやがて没落し、消滅していった。

二十世紀の現在なおこの地球上に生き残っている文明の「種」は、西欧文明、近東における正教キリスト教世界の本体、ロシアにおける正教キリスト教世界の分枝、イスラム社会、ヒンズー社会、シナにおける極東社会の本体、日本における極東社会の分枝の七つの「種」と、ポリネシア、エスキモー、遊牧民の三つの「種」の停止文明であるとインビーは分類している。…(中略)…

小松左京氏は「日本沈没」というきわめて優れた風刺的作品を発表したが、われわれの問題意識は、日本沈没の可能性が単に地質学的レベルで存在するのみならず、政治学的、経済学的、社会学的、心理学的レベルでも存在しているのではないかということであった。

もしかすると、地質学的に「沈没」してしまうはるか以前に、政治的、経済的、社会的に「沈没」してしまうかも知れない。…(中略)…

歴史的事実に照らしてみると、確かに第二次大戦後の日本は物質的にはめざましい再建をなし遂げたが、精神的には未だにほとんど再建されてはいない。

道徳は荒廃し、人心はすさみ切って、日本人の魂は病んでいる。日本はその個性を見失ってただぼう然とたちつくしたままである。

未来の歴史家はこの時代をどう見ることになるのであろうか。そして生まれくる若き未来の世代はこの病める日本をどうしようとするのであろうか。

…以上は、1975年「文芸春秋」に掲載された、「日本の自殺」という論文の抄ですが、「朝日新聞」本年(2012年)1月10日付け朝刊の一面に、この論文を取り上げ、「日本の自殺」がかってなく現実味を帯びてきたとありました。

今から37年も前に書かれた論文が、現実味を帯びてきたとは、穏やかでは有りませんが、この論文を読んでもみると、さもありませんという気がします。

東日本大震災、それに続く原発事故、その後の報道を見ていると、天災よりも人災の方が多く見えてきます、日本政府のお粗末な対応も、日を経るに従い、一層きわだつてきます、与党、野党共に議員先生方は何を考えているのだろうか？

やはり、「人心はすさみ切って、日本人の魂は病んでいる」のは事実のようですが、「日本沈没」も「日本の自殺」も現実とならないよう祈っています。

マヤ暦は2012年12月21日までしか無いが、地球最後の日・人類滅亡の日となるのか？